

映画を題材に英語の学び方を考える 『英国王のスピーチ』を題材として

齋藤 由紀

Learning English by Watching Films ~ The case of *The King's Speech* ~

Yuki Saito

Abstract

This is a practical report of the author's teaching of English language, culture, and history using the film *The King's Speech* in English Literature 3 for non-English majors at a Japanese university.

Using films to teach English has a lot of benefits for the students. First of all, they can listen to various authentic English conversations. Also, they can learn aurally English phrases and expressions through dictation activities. Role playing as actors of the film can provide speaking practice in rather authentic situations.

In this report, the effects of the actual classroom teaching using the activities listed above are discussed.

キーワード

映画 リスニング ディクテーション 英文学

はじめに：『英国王のスピーチ』という映画作品について

「英語文学Ⅲ」の授業を担当して2年目を迎えた2017年前期は、映画『英国王のスピーチ』をとりあげて、英語および英国の文化に触れてもらうことを試みた。

『英国王のスピーチ』は、現在の英国女王エリザベス2世の父、ジョージ6世が吃音というハンディを抱えながら、国王という立場になってしまったがゆえ、国民や大衆に向けて語りかけなければならない状況に陥るといふ史実に基づいた物語である。彼にとっては難行ともいえるこの事態をどのように乗り越えていったのだろうか。本来、ジョージ6世は、先代ジョージ5世の次男であり、ヨーク公とよばれる立場にあった。王位継承の順位からみれば国王になる可能性は低い立場であったといえるだろう。しかし、ジョージ5世の長

* さいとう ゆき：大阪国際大学国際教養学部准教授（2017. 11. 21 受理）

男、つまりジョージ6世にとっては兄にあたるエドワード8世が、国王を退位するという事態が生じたために、図らずも国王となることとなったのである。

ジョージ6世が国王となった時、彼は少なくとも大きな二つの困難を抱えていたといえよう。一つは、外的な要因、第二次世界大戦が勃発するという未曾有の危機が迫りつつある時代が幕を開けようとしていた。あと一つは、内的な要因、先にも触れた吃音という自身の困難を抱えていたことである。歴史に「もし」をいっても仕方がないものの、彼がもし、国王にならなければ、あるいは、時代がそのような危機的な状況でなければ、演説する必要性はさほど多くなかったかもしれない。

今でこそ、元首が報道を通して一般大衆に語りかけるということは、奇異なことでも特別のことでもないと思えらるようになってきている。実際、英国の現女王エリザベス2世、ジョージ6世にとって長女にあたる彼女は、開かれた王室という言葉でも知られるように、メディアを通じて、広く大衆へ向けて発信するということへ積極的に取り組む姿勢がみとれる。また、受け止める側からもその行為自体は当然のように受け止められているといえよう。しかし、ジョージ6世の治世においては、メディアを活用して大衆に発信ということが、試行されている頃であったことが読み取れる。映画の中でも1932年、ジョージ5世のクリスマスのスピーチのシーン（第五回 00:29:04-）が挿入されており、ラジオ放送で国民にメッセージを伝える場面がある。

King George V: Sit up, straight back, face boldly up to the bloody thing and stare it square in the eye, as you would any decent Englishman. Show who's in command.

Bertie: Papa, I don't ...think I can read this.

ラジオ放送であるのだから、聴衆には姿がみえるわけがないのだが、「背筋を伸ばして、堂々としている」とか「誰が主導権を握っているのか見せてやれ」といった表現が使われているところに、ジョージ5世が時の放送というものに抱いていた感覚が読み取れるではないか。パーティは、父のことばに「私にはできない」と気弱に答えるところに、自身の抱えている問題（吃音）を理解してほしいという気持ちの表れをみてしまう。厳格であったといわれているジョージ5世とパーティの親子関係を垣間見ることができるシーンの一つである。

続くジョージ5世の言葉をみてみよう。

King George V: This devilish device will change everything if you don't. In the past all a King had to do was look respectable in uniform and not fall off his horse. Now we must invade people's homes and ingratiate ourselves with them. This family's been reduced to those lowest, basest of all creatures ...We've become actors!

“This devilish device”とは、マイクのことを指しており、そして、「いまや王族たるものが一般庶民の家庭に忍び込み、彼らの機嫌をとらなくてはならないのだ」「我々は役者に成り下がったのだ」という言葉にいたっては、まるで、放送というものを克服しなければ

映画を題材に英語の学び方を考える『英国王のスピーチ』を題材として

ならない敵のようにあたかもみなしている心情が読み取れてくるのではないか。

この映画は、タイトルが示すがごとく、ヨーク公であるバーティが、ウェンブリー・スタジアムで大英帝国博覧会の閉会式のスピーチを行う場面から始まる。大勢の人を前にして、スピーチがまったくできないことが明らかにされている。彼の吃音を矯正することとなるライオネルもその場に居合わせていたことが、後に映画の中で明かされていく。

Lionel: Bertie, I heard you at Wembley, I was there. My son Laurie said, "Dad, do you think you could help that poor man?"

なお、映画のラストシーンでは、ジョージ6世となったバーティが、第二次世界大戦の開戦について、国民に向けてスピーチをする場面である。ウェンブリー・スタジアムからまさに隔世の感のする素晴らしいスピーチを披露することとなるが、そこにはライオネルの姿があるのであった。

スピーチ音声そのものは、ラジオ放送元であるBBCのサイトに紹介されている。また、You Tube等のサイトにも音声ファイルがアップロードされているので、視聴しやすい。当該スピーチをテキストファイルに転写したものについては、イギリス王室の公式サイトにアップロードされているPDFファイルもある。¹

I 授業の概要

1 目的

授業の目的は、大きく二つのことを設定した。一つは、映画を用いて実際の英語を聞き取ることで、聴解力の向上を図ることである。また、単なるインプットを受けるだけという受動的な参加の授業スタイルに陥らないために、視聴したあとで、ロールプレイをするなどして、発音や英語の発話に慣れる活動、解答をホワイトボードで発表するというのもできるだけ取り入れた。二つ目は、英語の発音練習を行うことである。この映画の中では、吃音の治療法として発声方も紹介されており、英語の発音の基礎訓練的な要素が紹介されているので、それらについても参考にするように指導した。

2 授業デザインと授業計画

前期15回の授業で、映画全体を視聴しながら、内容把握や聞き取りを行っていく。英国の発音に慣れることや、日常見ることができない建物なども紹介されているので、そういったところはできるだけ紹介するようにし、英国や英国の文化への興味を喚起するように心がけた。

初回は、映画の内容を概観し、前半にあたる部分を視聴させる。2回目以降は『英国王のスピーチ』を残り14回で視聴できるように各回のシーンを区切る。これは、スクリプトとして採用した書籍のドットとよばれるマークを頼りに行うことができたので、さほど難しい作業は必要としなかった。

毎回の授業では、その回のチャプターでの見所や英国の文化などについて話をしてから、実際に視聴していく。英語としての表現や、聞いて意味のある箇所をディクテーションさ

せるように留意した。ディクテーションは、台詞のうち、毎回 15 から 30 箇所を準備しハンドアウトを作成する。おおむね、受講生が 30 分程度ですべて聞き終わることができる量をこころがけた。ハンドアウトは A4 版で 3 枚から 4 枚で、それを A3 版 2 枚にまとめて配布する。学生たちは視聴が終わるとヘッドセットをはずしていくので、誰が聞き終わったのかは簡単に知ることができた。

教室前方にあるホワイトボードに解答を記入させる。最初は一人あたり一箇所とする。解答する機会は一旦このように公平に割り当てたあと、解答が記入されていない箇所については、再び解答者を募るようにし、できるだけ学生によって台詞が完成できるように導いた。そして、この取り組みについては、積極的な授業態度として評価に組み入れた。

評価としては、ホワイトボードへの解答の様子、ハンドアウトの解答の様子、授業中のペア活動について行なった。

3 留意点

各自必要に応じて、音声を何度も繰り返して聞く作業ができるようにする必要がある。そのため、CALL 教室を使って授業を実施した。ただし、映像を録音して各自再生視聴できる環境がなかったため、スクリーンプレイ社発行の iPen 用²のテキスト、ならびに音声を用いた³。

映画を英語のリスニングに用いる場合、台詞を起こすことが、非常に手間がかかる。そこで、スクリーンプレイ社発行のテキストを採用し、スクリプト作成の手間を省いた。また、著作権の問題があり、音声も iPen と呼ばれるものを購入して、それで再生できる音源を利用することとした。そのため、実際の映画の音声を聴き取ることに比べて、かなり聴き取りやすくなっている音声を、学生は聴き取ることとなったといえる。

進捗状況をみながら、時間を区切り、ディクテーション箇所を発表させる。発表は、学生の自由意志で行う。つまり、各自がわかった箇所について、教室前方にあるホワイトボードに記入してもらうという方法とした。すべての解答を確認したあと、ペアになり、成り切りトークを行う。この映画の場合、ほとんどがジョージ 6 世（映画の中ではパーティと呼ばれていることが多い）と彼の主治医、セラピストであり親友であるライオネル氏の会話であった。

II 映画で英語を学ぶことの意味

日本語母語話者が英語を何年学習しても英語で話せないという批判はつねづね耳にするところである。英語学習者にとって、英語ネイティブスピーカーと毎日対話ができるような環境があれば、かなり改善に近づくことができだろうが、現状では難しい。教授する側としては、学習者にできるだけ生の英語を多量にインプットとして与えたいと考えるところである。第二言語習得理論からもインプットの重要性が指摘されているのは、周知のところであろう。そこで、学習者が飽きることなく、大量のインプットを受けることを無理なく可能にする方法を考えるとき、映画は有効だと考えるにいたったのである（新井他、1996）。続いて、映画利用がいかに学生の興味をひき、英語学習への動機付けになっている

映画を題材に英語の学び方を考える『英国王のスピーチ』を題材として

かについて検証を加えたうえで、映画の台詞をテキストファイル化する方法から教材にするまでの教材作成のプロセスを紹介した（新井他、1997）。このことにより、誰にでも映画を題材としてリスニング教材を作成できるようになったわけだ。

映画を題材として英語力向上に取り組む中、映画に出てくる語彙への関心が目覚め、そのことについても研究を行った。リスニング教材として映画を選ぶ時、内容や使用されている英語への考察が必要となる。教授者側の感覚に頼って、映画の選定を行ってきたが、映画に出てくる語彙を分析することで映画の難易度を測定できることが可能となった。なお、中学校で使用されている検定教科書に出てくる語彙を一つの基準として扱いそこから難易度を測定することとした（新井他、1998）。

ところで、映画の聴き取りをさせる際に、学習者が難しさを感じる要因は、語彙以外にも考えられる。そこで、「台詞の長さ」を基準に行うことに研究を進めた。映画の台詞と台詞の長さに着目して分析を試みた（新井他、1999）。映画で話される会話を語彙や台詞の長さというものを基準にして、映画の難易度を測り、学習者にとってどの映画が適正であるのかについて分析できるようになったわけである。

さらに、映画の台詞をリスニングさせて、書き取らせるという学習を行っている。その場合、一度聞いて分からない台詞については、何度も聞き直すことをさせる。そこで、この繰り返し聞くことの効果についても研究を行った。結果としては、単に繰り返して聞くだけでは、四回までが有意に効果があることがわかった。が、それ以降は何度繰り返しても聞き取れないわけで、四回以上繰り返して聞くことには意味がない（金川、2003）。このようなことに配慮しながら、「英語文学」の授業では、映画を題材にして英語力の向上を目指しているところである。

映画を題材として取り上げることの意義については、まとめると以下のような三つがあると考えられる。①学習者へ本物の英語を与えることになる。上述した映画についての研究から、学習者に適当なものを与えることができれば、インプットとして良い素材になるわけだ。②映画の内容や授業デザインによって、学習者の興味関心を喚起でき、さらにそれを持続させることができる。回を追うごとに映画の内容にひきつけられていき、授業への参加度がある程度保てる。よって、動機付けの観点からも映画を扱うことの有効性が指摘できるだろう。③台詞以外にも作品の背景知識を通して、歴史や文化といったことなどへの視点や示唆を豊富に与えることができる。

Ⅲ 各授業（チャプター）の見所・聞き所

第一回：授業全体の目的とながれについて説明を行う。2017年現在、英国の女王であるエリザベス2世から遡ってヴィクトリア女王にいたる英国の歴史について概観する。そのあと、『英国王のスピーチ』を視聴する。

第二回：00:05:05～

場面：1925年に行われたウェンブリー・スタジアムでの大英帝国博覧会の閉会式で、ヨーク公（後のジョージ6世、ジョージ5世の次男、以下パーティとする）が演説を行う場面。

吃音の治療のために、ヨーク公夫人であるエリザベスがライオネルの元を訪ねるところまでを視聴する。この映画が生まれる由来を教えてくれる場面。映画は最初の5分が重要だときいたことをあらためて思い出す。大勢の民衆の前にスピーチをせざるをえなくなった主人公、ただでさえ緊張するであろうに、吃音という問題を抱えていることが描かれている。その姿が痛々しく、見ている側に主人公の苦しみが直接伝わってくる場面である。

聴き取る箇所：パーティの吃音の治療のために訪れたブランディン・ベンサム卿とのやりとりとその後、治療方を探してライオネルの治療院を訪れるエリザベス夫人との会話。

一言：ブランディン・ベンサム卿とのやりとりからは、1900年代初頭の吃音治療法が紹介されている。ビー玉を数個口に入れ、その状態で本を朗読するといった方法である。古代ギリシャから伝わる方法だと医者の説明するが、逆にその時代から、吃音の治療については何も進歩していないことがわかる。

Elizabeth: Excuse me, Doctor. What is the purpose of this?

Sir Blandine-Bentham: Well, it's the classic approach. It cured Demosthenes.

第三回：00:12:04～

場面：ライオネルの自宅の様子からパーティが家族であるエリザベス夫人、リリベット（長じてエリザベス2世）、マーガレットの二人の娘との日常生活が描かれる場面。続いて、ライオネルが役者としてオーディションを受けているところまで。

聴き取る箇所：ライオネルと家族、パーティとその家族とのそれぞれの日常会話を聞く。主人公二人の日常生活が描かれている場面で、物語の伏線となる重要な要素が伝わってくることに留意させる。

ヨーク公という公的な地位を離れた一人の父としてのパーティの普段の姿を知ることができる。愛娘二人に物語をする場面では、愛情が画面からあふれて伝わってくる。平常では吃音はさほどひどくないことがわかる場面だ。一方、ライオネルは、演劇をするという趣味をもつことがわかる。演劇をするためには、声を聴衆に届けなくてはならないわけで、ライオネルが当然発声方を身につけていることが理解できるようになっているところだ。また、シェークスピアの演劇が大好きであり、セリフをそらんじることができるほどであることが示されている。これは彼の教養の高さを示しているのであろう。その意味で、ライオネルがオーディションを受ける場面は、短いカットであるものの、ライオネルというこの映画の重要人物の資質を示すには十分だ。

一言：ライオネルは、パーティ（ヨーク公）が自分の患者になることを妻マートルにも話さないでいる。

Lionel: I had a special visitor this afternoon.

Myrtle: Who is it, Lionel? Why bring it up, if you can't talk about it?

Lionel: Myrtle, it's just a woman looking to help her husband. Oh, and I had a call for an audition. One of my favorites.

第四回：00:17:38～

場面：パーティとエリザベス夫人が、ライオネル治療院を初めて訪れる。ライオネルは、治療のためには、対等の関係を築くことが重要だと考えていることがわかる。ライオネルは、パーティにヘッドセットを通して音楽を聴かせながら、ハムレットを読ませ、それをレコードに録音させるのだが、パーティは怒ってしまい、それを途中で止めて帰ることとなる。

聴き取る箇所：パーティとライオネルの会話で、主にライオネルの発話を聴く。ライオネルはスピーチセラピストとして、患者の様子を見る。相手が王族であろうが、できるだけフラットな接し方、つまり医師と患者でもなく、王と従僕でもなく、友人のような関係性を築こうとしている様子が描かれており、二人の掛け合いが興味深い。

一言：パーティとライオネルがお互いをどう呼ぶのが相応しいのかについて意見を交換する場面では、それぞれの性格が現れている。

Bertie: Aren't you going to start treating me, Dr. Logue?

Lionel: Only if you're interested in being treated. Please, call me Lionel.

Bertie: No, I ...prefer Doctor.

Lionel: I prefer Lionel. What'll call you?

Bertie: Your Royal Highness, then...then Sir after that.

Lionel: It's a little bit formal for here. I prefer names.

Bertie: Hm. Prince Albert Fredrick Arthur George?

Lionel: How 'bout Bertie?

Bertie: Only my family uses that.

Lionel: Perfect. In here, it's better if we're equals. (pp44-46)

第五回：00:29:04～

場面：1934年、ジョージ5世がクリスマスの放送を行っている。王は傍にいる次男パーティにラジオ放送をするように強制するが、吃音のためうまくいえないでいる。夜になり、パーティはライオネルから渡されたレコードがあったことを思い出し、かけてみる。そこから流れてきたのは、「生きるべきか死ぬべきか・・・」と、あの有名なハムレットのセリフをすらすらと話す自分の声であった。自身の声を耳にしたパーティは妻エリザベスを伴い、ライオネルの治療院を再び訪れる。

聴き取る箇所：はじめにのところで述べたように、ジョージ5世がラジオ放送、長男デイビッドとシンプソン夫人とのことなどをどのようにとらえていたのかがわかる。また、息子たちには父あるいは王としての権威を誇示していたようである。

一言：父からラジオ放送のための練習を強いられるのであるが、うまく言えないパーティである。

King George V: Well, with your older brother shirking his duties, you're going have to do a lot more of this. Have a go yourself.

第六回：00:34:10～

場面：パーティは、ライオネルの治療院で音楽を聴きながらハムレットの一説を読ませられた。自身の声を録音したレコードを聴くことで、吃音治療のためにもう一度ライオネルに会ってみるのだった。

英語の発声のために行うといい訓練法を知ることができる場面である。例えば、早口言葉を楽しむことができるし、顎をゆるめて“La, la, la…”というなど、参考にしたいことがたくさん紹介される。“Jack and Jill”というマザーグースの歌も出てくるので、それもハンドアウトにして配布し、学生たちとよんでみた。

聞き取る箇所：ライオネルがパーティのために、英語の発声法を訓練するところを中止にする。

一言：患者であるパーティをライオネルは、叱ることもあり、またある時は褒めたりしながら治療が行われる。いくつか書き留める。

Lionel: You've got a short memory, Bertie. Come on.

Anyone who can shout vowels at an open window can learn to deliver a speech.

Come on, one more time, Bertie. You can do it.

第七回：00:38:30～

場面：1936年、ジョージ5世が臨終の床にあるサンドリングラム宮殿の様子、国王崩御のラジオを聴くライオネルの家庭生活が描かれる。

聞き取る箇所：パーティは兄デイヴィッド（エドワード8世）の到着を待っている。兄は恋人のウォリスとのことで頭がいっぱいのようなのである。ジョージ5世の崩御にともない、泣き崩れるデイヴィッド、その様子に不安を感じる王家および国の主要人物たちの会話を聴く。

パーティの兄デイヴィッド（エドワード8世）がウォリス（シンプソン夫人）との恋愛により王位を捨てた話はあまりに有名である。このことがあったから、次男であったヨーク公ことパーティがジョージ6世として後に国王となるのであるが、先王ジョージ5世の臨終の場面を描くことで、その当時の王室や政府高官、聖職者など王家を取り巻く人々の様子や国王の臨終の様子が伝わってくる。また、ライオネル一家が国王崩御についてラジオ放送を通じて知ることは、当時のメディアの果たした役割が語られている。

ライオネル一家が日常的にシェークスピア劇のセリフ当てごっこをしていた様子からは、ライオネルの文学への深い造詣がよみとれるし、家庭生活にあって当時のジェントルとよばれる人たちの娯楽の一端を知ることができる。

一言：父が臨終の床にあっても、恋人との電話に夢中のデイヴィッドである。

Bertie: David. The dinner.

David: I'm on with Wallis! It's Bertie. No. No, it's not important. Oh...I don't want to.

No. Telephone me later? Alright. Bye.

: Wallis misses me terribly.

第八回：00:47:10～

場面：ライオネルの治療院にパーティが訪ねてくる。

聴き取る箇所：ライオネルとパーティが、お互いのことを語り合う。よって、視聴者も二人の人生について多くのことを知ることとなる。

父親の臨終にライオネルは立ち会うことができず、それを今でも悔いていることを語る。それを聞きながらパーティは、本来左利きであったが矯正されたことがあったことや、脚がX脚にならないために、金具をはめさせられたりしたことなどを語るのであった。こういったことは、吃音をもつ人たちにはよくあることだということがライオネルの口から語られる。おそらくライオネルは、パーティの吃音という身体的症状から、彼の抱えている心の傷の存在に気づき、それを取り除く必要性を感じていたのだ。それでリラックスした雰囲気の中で、相手が心を開くのを待っていたことがわかる。

一言：パーティは、もともとは右利きであったが矯正されたことがわかる場面。

Lionel: Are you naturally right handed?

Bertie: Left. I was p...punished, and now I use the right.

Lionel: Yes, that's very common with stammers. Any other corrections?

Bertie: Knock knees. Mm, mm...Metal splints were made...worn, worn day and night.

Lionel: Must have been painful.

第九回：00:55:50～

場面：スコットランドにあるパルモラル城でデイビッドの主催するパーティが開かれている。パーティは、そこで兄から王位を狙っているというような侮辱を受けるが、吃音のせいで言い返すことすらできない。

パーティは城へ向かう車の中でもライオネルに教えられた早口言葉の練習をしている。このとき、パーティには、自身が国王になるなどという意識はなかったと思える。しかし、結婚が不可能である女性と恋に落ちている兄の姿をみてしまったこと、兄から吃音という自分の傷に触れられたことで、兄弟間に微妙な葛藤が生まれる。

聴き取る箇所：デイビッドとパーティのいさかいの場面。ウォリスにすっかり尻にしかれているかの兄の様子に、国王として威厳をもってもらいたいのであろう。しかし、デイビッドは、弟パーティが吃音の治療を行っていることをきいていて、王位を狙っているのか、と応戦する。

一言：兄弟二人の葛藤の場面を取り上げる。パーティの吃音口調を真似てみせることで貶めようと図る。

David: That's what this is about? Brushing up. Hence, the elocution lessons? That's the scoop around town.

Bertie: I'm trying to...

David: Yearning for a larger audience are we, B-b-b-bertie?

Bertie: Don't...

David: What's that? I'm sorry, I...Younger brother trying to push older brother off the

throne...P-p-p-positively medieval.

第十回：01:00:44～

場面：兄とのいさかいの悔しさを胸にライオネルの治療院を訪れるパーティ。そんなパーティを受け入れ、あえて感情を制御することなくそのまま口にするという方法をとるライオネルの治療法をみる。短い、二人のリズミカルなやりとりが興味深い。

聞き取る箇所：兄から王位を狙っているなどと侮辱されたにもかかわらず、吃音のために思うように言い返せないパーティ。その悔しさをライオネルにぶちまけるのだった。幼いころより矯正をされてきたことで、自分をそのままに表現することが困難になっているのであろう。そんなパーティをみて、吃音という身体的症状の根幹にある感情の発露の障害を取り除こうとするライオネル。ライオネルは日常では、口にはしてはならないとされる言葉をあえて口にしてみるという治療を行うのだった。

一言：パーティの感情をあえて激する方法をとるライオネル。余談であるが、日本の芸者という詞が庶民に浸透していたこともわかる場面である。

Lionel: Why do you stammer so much more with David than you ever do with me?

Bertie: Because you're bloody well paid to listen!

Lionel: Bertie, I'm not a geisha girl.

Bertie: Stop trying to be so bloody clever!

Lionel: What is about David that stops you speaking?

第十一回：01:04:48～

場面：パーティは、時の首相ボールドウィンと兄デイビッドの問題を話している。兄がもはや王としての責務よりもシンプソン夫人との生活を取る形勢となることが、場面を展開させながら進んでいく。一方、ライオネルは、自宅で妻のマートルに治療が思うように進んでいないある一人の患者、つまりパーティのことについて打ち明けるのだった。ラジオからは、エドワード8世とシンプソン夫人を巡る問題が語られている。いよいよパーティの王位継承が現実味を帯びてくる。

聞き取る箇所：パーティとボールドウィン首相との会話、ライオネルがマートルに心境を語る場面、チャーチルがパーティにジョージ6世となるように進言する場面に渡り聞き取る。また、通常、口にはしてはいけないとされる部類に入る単語を、パーティが感情のまま口にする場面では、彼がとらわれていたさまざまな呪縛から解放されたことが伝わってくる。

一言：パーティがジョージを名乗るようになった経緯が紹介されている。

Churchill: Have you thought what you will call yourself? Hm?

Bertie: I...I...

Churchill: Certainly not Albert, Sir. Too Germanic. Hm, hm, hm.

What about George? After your father? George the sixth. Has a rather nice continuity to it, don't you think.

映画を題材に英語の学び方を考える『英国王のスピーチ』を題材として

アルバートという名前は、ドイツ的であるので、国王としては相応しくない、ジョージにすれば父君からの継承としても悪くないという進言である。ちなみにアルバートと聞けば、ヴィクトリア女王の夫を思い出す。

第十二回：01:16:29～

場面：パーティが王として即位することが現実となり、エリザベスに苦しい胸中を打ち明ける。即位の式典で述べるスピーチ原稿も渡され、いよいよスピーチの機会は増加の一途をたどることが明白となる。彼の胸中にはライオネルへの信頼があったのだろう。彼の元を再訪し、謝罪をする。

聴き取る箇所：パーティがライオネルの自宅を訪問する。家族は出かけて留守。パーティとライオネルがお互いの気持ちのすれ違いについてやり取りをしていると、マートルが予定よりも早く自宅にもどり、思いもかけず、国王と王妃に出会うのであった。

一言：外出からもどり、自宅に王様がいたら、どんなに驚くだろう。そんな時、案外人としての本質が現れると思う。ライオネルの妻マートルは、王妃エリザベスにこういう。

Myrtle: Will their Majesties be staying to dinner?

Elizabeth: We would love to, such a treat, but ah...alas...previous engagement. What a pity.

第十三回：01:21:09～

場面：ウエストミンスター寺院で戴冠式の準備がされている。パーティはライオネルの資格についての疑義を話し出す。ライオネルは、ドクターといった肩書きこそ持たないが、言語障害専門のセラピストであること、そのことに誇りをもっていることなどが語られる。二人の友情が深まっていることがわかる場面である。

聴き取る箇所：パーティは、戴冠式にライオネルも同席を希望するが、ラング司教は、それに難色を示す。あろうことか、パーティの治療にはもっと相応しい人物を推挙するとまで言い出すのだった。パーティとライオネルの会話の中で、第一次大戦という人類にとって未曾有の危機の影響やライオネルの来歴が語られる。パーティが極度に緊張しないように、ライオネルは、負担軽減にむけて着々と準備していることが伝わってくる。

一言：普段では見ることができないウエストミンスター寺院の奥まった部分を視ることができる。ライオネルがパーティの治療を志した理由が語られる。

Lionel: Bertie, I heard you at Wembley, I was there. My son Laurie said, "Dad, do you think you could help that poor man?"

第十四回：01:30:46～

場面：戴冠式が終り、録画映像を見ているパーティ一家。ドイツへの宣戦布告となり、ラジオなどで国民への呼びかけなどスピーチをする機会が必然的に多くなるジョージ6世、彼はライオネルを宮殿へと呼び寄せるのであった。

聴き取る箇所：登場人物が多いが、比較的聞きやすい英語があるため、重要な表現を含

んでいる台詞を中心にディクテーションをする。パーティの口調も滑らかで聞き取りやすくなっていることに気づいてもらえるとよいだろう。

一言：ドイツと戦争状態に入り、初めてのスピーチを行うことになる。緊張高まるパーティにライオネルは、いくつか助言をするのだった。

Lionel: Turn the hesitation into pauses, and say to yourself, "God save the King".

Bertie: I say that continuously, but apparently no one's listening.

Lionel: Long pauses are good, they add solemnity to great occasions.

第十五回：01:40:33～

場面：国民にむけて、いよいよラジオをとおして、ドイツとの戦争となったことについてスピーチを行う。クライマックスである。

聴き取る箇所：放送ブースへと入り、パーティ、エリザベス夫人、ライオネルが放送前の緊張する時間を過ごす場面、実際のスピーチ、スピーチを終えてみんなから賞賛されるパーティを描くところで、重要な表現を含んでいる台詞や、覚えてほしいセンテンスを中心に聞き取る。

一言：狭い放送ブースにライオネルもともに入り、そこにいて行われたスピーチであったことがわかる。

Lionel: Forget everything else and just say it to me. Say it to me, as a friend.

スピーチが終わったところで、「W のところで、口ごもることがあったな」と指摘するライオネルに、「話し手が私だとわかるために、少しはそういうのを挟まなくてはいけなかったんだよ」と答えるパーティ。本当に軽口まで言い合える仲になっている二人であった。

Lionel: That was very good, Bertie.

: You still stammered on the "W".

Bertie: Well, had to throw in a few so they knew it was me.

IV 学生からの感想

最終授業では、受講生 15 名に自由に感想を書いてもらったので、ここに紹介する。できるだけ原文のまま掲載している。

“But we can only do the right as we see the right.” では、戦争動員が行き過ぎているように感じた。戦争に向けて国を一つにしようというのはわかるが、戦争批判の歌の詞にもなりそうだな、と思うくらいには印象が強かった、私には。(TS さん)

普段見ることができない場所も見ることができて、とても興味深かったです。人が苦手なことに向きあう大切さを学べた。特に印象に残ったシーンは、(ジョージ 6 世) 陛下がスピーチを成功させて写真を撮り終わった後に、国民に手を振っている陛下の後ろ姿。ライ

映画を題材に英語の学び方を考える『英国王のスピーチ』を題材として

オネルの心情を考えさせられました。(親が子を送り出すイメージ。陛下に怒鳴られても、帰れと言われても逃げずに陛下のことを第一に考えていて良かったという心情)。(FKさん)

英国はヴィクトリア女王のイメージがとても強くてジョージ6世のことはあまり知らなかったが、実話の映画をみて、ライオネルとジョージ6世の関係がとてもいいと思った。(KNさん)

ライオネルが最後に、パーティ(ジョージ6世)たちが外に向かって手を振っているシーンを後ろからみているシーンが、心に残っている。(KEさん)

この映画はおもしろかったです。リスニングは、実際の映画の音声になると難しくなるなど改めて思いました。難しかったです。けれども、映画でみて、リスニングしていると、こういう時はこんな言い方するのかと思うことがときどきあったので、おもしろかったです。(MRさん)

病気と向かい合い、身分の違う医者に教わるという昔ではあまり受け入れられなかった事を友情で乗り越えていく結末も良かった。主人公のジョージ6世だけでなく、兄のエドワードの恋愛のリアルなところなど王の周りの関係などもとても面白かったです。(YSさん)

『英国王のスピーチ』を見て、最初の場面でパーティ(ジョージ6世)がスピーチを行ったときは、これからどのようにしていくのかわかりませんでしたが、ライオネルと出会い、最後には立派なスピーチを行ってとても感動しました。物語の中で、二人は言い争ったり、パーティ(ジョージ6世)が投げ出してしまったりと様々な障害はありましたが、あのスピーチが最終的な結末ではなく、その後も二人は戦争のスピーチを通し、良い友人であったのを知って素直に素敵だと感じました。当時のパーティ(ジョージ6世)にとってライオネルは欠かせない存在であったのだと思える映画でした。(KKさん)

『英国王のスピーチ』は、今回が初めてでした。とてもおもしろかったし、興味深い映画でした。ライオネルが王様相手になれなれしい態度、見ていて飽きませんでした。またもう一度見たいと思いました。(MMさん)

『英国王のスピーチ』を見るのはこれで4回目でしたが、改めて観ると英国の文化や独創的な英語の言い回しを学べて、ストーリー以外でも楽しむことができました。(TYさん)

今回この映画を観て、言語障害の人の辛さを知りました。また、イギリスの歴史的背景なども学べてとても勉強になりました。(YTさん)

最後のパーティ（ジョージ6世）がスピーチをしたところが、とても感動しました。心の中で「がんばれ」とつい思ってしまいました。（MKさん）

ライオネルの頑張りがすごいと思った。パーティ（ジョージ6世）にかなり悪口を言われても、パーティ（ジョージ6世）のために治療を行っていくのが良かった。（TMさん）

パーティ（ジョージ6世）が戦争を始めるというスピーチのシーンが心に残りました。（OYさん）

一番心に残っているシーンは、ライオネルの診察室でパーティ（ジョージ6世）がぶち切れてFワードを連発していたシーンです。いくらイギリスの王族でも、一人の人間だから結局は同じなんだと感じました。（SSさん）

V まとめ

火曜日の朝1時間目の授業ということで、学生が睡眠不足気味の顔であわててやってくる姿もときに見かけたが、ほとんどの学生が積極的にディクテーションといった課題に取り組んでいた。受講生のほとんどが真面目であり、英語の教員免許履修希望学生には、必修教科であることも出席率を高めにする要因となっているのであろう。授業担当者としては、選択したこの映画自体の魅力を軽んじることができないと考えている。

英国といえば、何をまっさきに思いうかべられるだろうか。築後数百年を経ている煉瓦や石づくりの建物、その内部に配されたアンティーク家具や調度、敷物やカーテンの類、銀に代表される食器類。この作品ではそういったものに加えて、英国を訪問してもなかなか観ることのできない宮殿内部や戴冠式の様子なども見ることができた。加えて、登場人物の服装も興味深い。パーティやエリザベスの服装は、公の場と私的な生活空間での対比に特に興味がそそられる。その一方で、庶民を代表するライオネル一家の服装や自宅のしつらえなど、セリフのディクテーションを終えた後は、そのあたりも楽しみたい作品である。

課題としては、映画を題材として英語をまなぶという授業を行う場合、どういった取り組みが効果を上げるのかということだ。ディクテーションを取り入れてきているが、これから内容把握や英訳、和訳などより充実させてゆきたい。学生たちは、生の英語を聞き取るという作業に、最初戸惑いを見せることもある。しかし、回を重ねるごとに英語を聞き取れることに楽しさをおぼえ、もっと聞きたい、わかりたいという欲求が大きくなるようである。

今後は、英語力の向上のために、映画を題材として用いる際に、ディクテーション以外の方法、質問に対して答えることや、予想される台詞を考えておいてから実際に視聴すること、聞き取った台詞を使ったスキット作成など、どのようなタスクを課すことが有効といえるのかについて、研究を行っていく所存である。

注

¹ 青木 繁博 2013 「英国王ジョージ6世のスピーチにおけるワードペアの劇的効果」新潟青陵大

映画を題材に英語の学び方を考える『英国王のスピーチ』を題材として

学短期大学部研究報告 第43号 p8

- 2 iPen とは、書籍（ドット印刷）にペン先をあてると音声ができるペンです。聞きたい時に聞きたいセリフを何回でも再生できます！（スクリーンプレイ社 HP より）
- 3 この映画の「ドット印刷」に対応した音声録音を担当したのは Sheila Patton, Erin Kennedy, Mark Hill, Steve Morris の4名です。新作映画の音声は著作権の制約により使用できませんので日本在住のネイティブさんにご協力いただきました。映画の音声そのものではありませんが、そのかわり、比較的ゆっくりと発音明瞭に録音でき、初期のリスニング訓練には最適になりました。この音声再生で何度も学習し、最後は映画の音声に挑戦してください。（スクリーンプレイ社 HP より）

参考 URL

映画スターが英語の先生！ 知識と感動の映会話学習！！

SCREENPLAY スクリーンプレイ社 <http://www.screenplay.jp/isbn978-4-89407-487-3>
(2017/08/07 アクセス)

参考文献

- 新井尚子、金川（齋藤）由紀、酒井久美子、東郷多津、新井康友 「LL 教材の語彙検索」『Insight』 Vol.28, pp.83-90, ノートルダム女子大学英語英文学会, 1996
- 新井尚子、金川（齋藤）由紀、酒井久美子、東郷多津、新井康友 「LL の授業における動機付けの重要性－映画の有効な利用－」『ノートルダム女子大学研究紀要』第27号, pp.41-48, 1997
- 新井尚子、金川（齋藤）由紀、酒井久美子、東郷多津、新井康友 「LL 教材の基本語彙検索」『ノートルダム女子大学研究紀要』第28号, pp.1-14, 1998
- 新井尚子、金川（齋藤）由紀、酒井久美子、東郷多津、新井康友 「LL 教材における台詞の長さとその難しさに関する分析」『ノートルダム女子大学研究紀要』第29号, pp. 53-62, 1999
- 映画英語教育学会東日本支部（監修）『映画英語授業デザイン集』フォーイン スクリーンプレイ事業部（発売）, 2012
- 金川（齋藤）由紀 The Effectiveness of Repeated Presentation of Listening Materials on Japanese College Students' Listening Comprehension. 修士論文, 京都教育大学大学院, 2003
- 倉田誠（編）『映画で学ぶ英語学：English Linguistics Through Movies.』くろしお出版, 2011
- 都築雅子（監修）『名作映画完全セリフ音声集 スクリーンプレイ・シリーズ 162 英国王のスピーチ』株式会社フォーイン スクリーンプレイ事業部, 2012
- 原島一男 『映画のなかのちょっといい英語』麗澤大学出版会 / 廣池学園事業部（発売）, 2013
- 藤枝善之（監修）映画英語教育学会 関西支部（著）『暗唱したい、映画の英語：心に刻む感動の名セリフ集』金星堂, 2007.
- 藤枝善之（著）『使ってみたい映画の英語：男の名セリフを味わう』新潮社, 2007（新潮新書：199）.